ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

声の文化と絵本④

～声の文化のもとに文字の文化が成り立つ～

自分で探って確かめる

◆お正月で母が、台所で一生懸命菜っ葉を刻んでました。私は、母が台所で仕事をしてるってのが非常に興味がある。どういうことをやってるんだろう。どういうふうにするんだろう。何を使ってやってんだろう、と◆その野菜を見た時に「何、作ってんの」と聞きましたら、「七草粥を作るんだ」と言うんですよ。まあ、粥ってのは分かりますけど、〝七草粥〟って聞いたことがなかったんです。「七つ何か野菜があるようだけど、七草ってなあに」と聞いたんですよ◆そしたら母が、手を休めないで私の顔も見ないで仕事を進めながら「せり、なずな、ごきょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞ七草」と答えたんです。意味は分からないけど、それで覚えたんです◆大人になってから、野菜と照らし合わせて、どれが〝せり〟でどれが〝なずな〟か自分で見るようにしましたけれども、教えられるんじゃなくて、やっぱり自分で探って確かめると本当に分かります◆ですから、皆さんが、日常どういう言葉をお使いになってるのかということをもう一度考えてみる―そういうところから始めないといけないんですね。

日本語と国語

安野光雅・大岡信・谷川俊太郎・松居直編集
1979年/福音館書店刊

◆ここに、小学校1年生の子どもたちのために作った「日本語の教科書」があります。私は〝国語〟っていう言葉は使わないんです。なぜ〝日本語〟にしたのか◆小渕さんが総理大臣でいらした時、「子供の未来と世界について考える懇談会」ってのが、首相官邸で毎月1回、河合隼雄先生が中心になって、いろんなテーマで話をする会が開かれていたんです。どういうわけか、私も呼ばれて参加してたんです◆ある日、文部次官の方が「今月は、国語教育について問題提起をしたいと思います」とおっしゃった。それを聞いた途端、私は反射的に「国語はやめたらどうですか」と言ったんですよ。「どうして国語はいけませんか」とおっしゃるから、「私は、国から言葉をもらった覚えはありません」と言ったんです。

家族の土台に言葉がある

◆私は「言葉は、母親からもらったんだ」ということをとっても強く思う。と同時に、もっと大切なものを母親からもらったんだって気がつきました。母親からもらった一番大切なものは〝命〟なんだ。命のつながる体をもらった。そして、その「命を支える言葉を母親からもらった」ということに気がつきました◆学校教育ってのは、教えることばっかりで一番肝心な「命をもらった」「体をもらった」「言葉をもらった」―それが家族というものの土台になってるんだということを、小学校で子どもたちが自分で気がつくように、先生が教えるんじゃなくて言葉で語りかけられなきゃだめです。言葉ってのは、命を作ってるわけですから。

人の話を聞くことから

◆私たちが生きてるのは言葉の力。言葉なしには生きられない。だったら、もっと言葉ってものを大切に、もっと自分の中に豊かに蓄えないといけない。そこで一番大切なことは「人の話を聞く」ってことです。本を読むってこと以前に、人の話を聞く◆ですから、本当に言葉ってものを自分の中に身につけようと思いますと、聞くってことが第一。その次が話す。そしてその後で、読むとか書くってことが出て来るんですよ。聞くとか話すというのは「声の文化」なんです。読むとか書くってのは「文字の文化」なんです。声の文化と文字の文化は、声の文化がしっかりしてないと、文字の文化が成り立たないんですよ。（つづく）